# 空気、吸うだけ

ハットリミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空気、吸うだけ

【Ｎコード】
Ｎ６２０４Ｊ

【作者名】
ハットリミキ

【あらすじ】
ステキな夫、かわいい娘、充実した生活。
幸せな日々なのに、私が本当に望んでいるのは…。

## （前書き）

スッキリしない終わり方かもしれません。

「寒くないか？」
「ええ。大丈夫」
夫が自分のしていたマフラーを私にかけようとしたのを、私はやんわりと断った。
夫はいつもやさしい。顔もいい方で、背も高い。稼いできてくれる金額から考えると、仕事も出来る方なのだと思う。
「お。甘酒だ。飲んでいかない？」
人混みの中、彼は器用に甘酒を売っている屋台を見つけ、私の返事を待たずに駆けだした。
私は夫と初詣に来ていた。久しぶりに夫とふたりきりで出歩いていた。子供は夫の両親が見ていてくれると言うので、甘えた。義父も義母も、夫の兄弟たちも、いい人ばかり……。
「ほら」
いつの間にか戻ってきた夫が、私の分の甘酒を渡してくれた。
「ありがとう」
手にとった紙コップはあたたかく、立ち上った湯気で眼鏡が曇った。風景がぼやけた。
（夢の中にいるみたい……）
目に見えるものすべてに、現実味が無かった。
結婚して三年になった。頼もしい夫、理解ある義実家、かわいい子供に恵まれた私は、このご時世に悠々と専業主婦をやっている。結婚前と比べると、本当に夢のように思う。なのに。
「どうした？」
「え……何が？」
「いや、なんか疲れたような顔をしていたからさ」
夫はいつも鋭い。私は「ギクリ」という心の音を必死に隠し、精

一杯の笑顔を作った。
「この人混みだからね」
そこは人気のある神社で、ひどく混んでいた。元旦の深夜０時よりは少ないのだろうけれど、境内まで行列は続いていた。夫は私の言い訳に納得した様子だった。
ふと斜め前方に居る女の子の二人連れが目に入った。双方ともすっぴんで、地味な格好をしていた。
「この間買った本がさー」
「コミケでの？」
「そうそう」
そんな会話が聞こえてきた。
（懐かしいな……）
三年前までの自分を思い出した。今は夫のおかげで小綺麗な格好をし、化粧もきちんとしているが、その頃の私というのはひどく大雑把だった。そして当時は夢があった。

（漫画家になりたかったんだっけ）

子供の頃から絵を描くのが好きだった。同人誌活動にはまり、同人誌即売会など、そういったイベントへはよく出かけていた。そのジャンルでは人気のあるサークルで、一人前にファンレターなんかももらっていた。
けれどプロにはなれなかった。何度も投稿したが、いつも選外。やっと佳作に潜り込めたかと思えば、今度は雑誌に載るための壁が立ちはだかっていた。
その当時一人暮らしをしていた私は、佳作入選した時にアルバイトをやめてしまっていた。すぐにデビューできると思っていたのだ。けれどうまくいかず、まもなく生活は困窮し始めた。
早く作品を描いて、デビューしなくては。けれどそう思えば思うほど、筆が動かなかった。

やがて私は、何もせず、狭いワンルームの中で宙を見るか寝ているかで一日を過ごすようになった。小さな窓の外が、白から青、青から赤、赤から黒、黒から白へと繰り返し色を変えるのを、数日間見つめていた。私は少しおかしくなっていたのかもしれなかった。

そんな生活が一ヶ月以上も続いた頃、家賃が払われなくなったことを大家が保証人である実父に知らせたため、両親が大激怒で乗り込んできた。私はすぐに実家に連れ戻され、見合いをいくつもさせられた。反発心はあったけれど、逃げる等の行動に出る気力は無かった。

それで出会ったのが、夫だった。

彼が私のどこを気に入ったのか、私はいまだに理解できていない。けれど求められ、こんないい結婚相手はいないと親たちが判断し、あっという間に結婚に至った。

それからの三年間は、あっという間だった。

「もっとゆっくりしていればいいのに」

と彼が言うくらい、私は家事にしっかり従事していた。きちんと社会に出て、まじめに仕事をしている彼を見て、あの無為に過ごした時間を持つ私は後ろめたくなったのだ。私は彼に食べさせてもらっている。だからせめて家の中をキレイにし、おいしい料理を作り、疲れた彼を迎えようと思った。慣れるまでがたいへんだったけれど、楽しかった。

やがて子供ができると、それまでの家事に育児が加わり、ますます忙しくなった。しかし夫はすべて私に投げず、忙しいのにいろいろと手伝ってくれた。そのおかげでこんな私でも、立派に妻や母ができるようになった。夫にはすごく感謝している。

（けれど……）

漫画は書けなくなって以来、まったく書いていなかった。それどころかGペンなどの道具はすでに手元には無い。もう書き方も忘れてしまった。

そばにいた二人の少女たちは、楽しそうに漫画の話をしていた。

当時の同人誌活動を共にしていた友人たちとはすでに疎遠だった。
しかし疎遠になったのは、結婚してからではなかった。
（書かなくなってからかな……）
あの生活…向上心など何もなく、ただ空気を吸うだけの日々を過ごし始めた頃、自分から一切の連絡を取らなくなったことで、みんな離れて行った。
（そうよね。私、プロになるって息巻いてたんだし）
当時の私は、上から目線の言葉を遠慮なく投げつけていた。
それなのになれず、結局自分の部屋に閉じこもっていただけ。みんなが離れて行ったのもあるだろうけれど、結局は恥ずかしくて自分から離れたのだ。
だからか「寂しい」とか「会いたい」とは思わなかった。
また、ふたたび漫画を書きたいとも思えなかった。
（私はこのまま、この人の妻として、子供の母親として生きていくのかな）
私は横で甘酒をすする彼の横顔を見ながら、そう思った。
幸せなのだ。面倒だな。
嫌だな。けれど。
最近、そんな感情が私の中に渦巻いていた。自分の思ったことに嫌悪を感じた。
部屋をどうやったらキレイにするか。いかに安く、おいしい料理を作るか。どのようにして子供を育てるか。ママ友たちとどんな話題で盛り上がろうか……。
（なんか、全部がめんどくさい……）
夫に見せる笑顔ですら、面倒になっていた。
「子育てで忙しいんだったら、ヘルパーさんでも頼む？」
と夫に言われたことがあった。その時は慌てて否定したが、今は少し後悔している。
私は、自分の時間が欲しいのだ。
家事をして、育児をしてでも、コーヒーを一杯飲む時間くらいは

ある。けれどそういうことじゃない。
（この人も子供も何もかも捨てて……）
そう想像してみたものの、できるわけがないから思うのをやめた。
「もうすぐだね」
夫がわくわくを隠しきれない様子で、話しかけてきた。気がつくと私たちは境内にすでに入っていて、賽銭箱まで間もなくというところまで来ていた。
「やはり家内安全かな」
彼はこれからお願いする内容を口に出したようだった。さっき彼を捨てることを想像したことで、自分がほとほと嫌になった。
（何をお願いしようかな）
小銭を財布から出しながら、考えた。夫の仕事が順調でありますように。家族が健康でありますように。子供が国立付属の幼稚園に入れますように…。そして、

何もしなくてもよくなりますように。

「危ないよ！　早くこっち行こう！」
後ろに押される前に、夫が私の腕を掴んで連れだしてくれた。
私は長いこと賽銭箱の前にいたらしい。すぐ後ろの人の舌打ちが聞こえた。私たちは出口に向かい、すぐに境内を出た。
「何を懸命にお願いしていたの？」
「え？」
私は自分の願い事を思い出した。「何もしなくてもよくなりますように。」と、確かに思った。
（やっぱり、私…）
どこかで、あの頃に戻りたいと思っていたのだ。ただ空気を吸う

だけの日々。自分だけを守って、ぬくぬくとただボウッとしていたあの頃に。
決して死にたいわけではない。今の良妻賢母をやっている私よりも、おそらくあの抜け殻のような汚い女の方が、おそらくは私らしいのだ。
しかし、戻れるはずもない。
「家族が、元気で過ごせますようにって」
私は良妻賢母に戻った。夫の笑顔を見て、（これでいいんだ）と思った。
「ねえ。おとうさんたちに、何をおみやげ買っていく？」
「！　おっ、おい！」

その時、ひどい衝撃が私の身体を跳ね上げた。

「……外傷はほとんど無かったのですが、頭部をかなり強く打ったのが原因のようですね。これはいわゆる、“植物人間状態”というものです」
「先生、妻はもう目覚めないんでしょうか？」
「それは……わかりません。奇跡的に目を覚ますという症例はまったく無いわけではありません」
「そんな……娘もまだ小さいのに……。初詣なんか行かなきゃよかった。そしたら飲酒運転の車にはねられるなんてこと無かったのに」
「お気の毒です」
「ねえ先生、見てやってくださいよ。妻の顔。なんだかうっすらと微笑んでいるように見えませんか？　まるで願いが叶ったかのような……」

了

## （後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6204j/

---

空気、吸うだけ

2010年10月8日14時44分発行